

欧州のイスラム系移民における政治参加

ーオランダ労働党の移民政策の影響と政治アクセスの変容ー

Political Participation by Muslim Migrants in Europe:

Effects of the Immigration Policy of the Dutch Labour Party and Transformation of Political Access

小山 友 Tomo OYAMA

千葉大学大学院 人文公共学府 人文公共学専攻

Graduate School of Humanities and Social Sciences, Chiba University

キーワード: オランダ、イスラム系移民、エスニック・ポリティクス、オランダ労働党

Keyword: The Netherlands, Islamic Immigrants, Ethnic Politics, The Dutch Labor Party (PvdA)

1. 研究背景と課題

近年、欧州では大量の難民流入やイスラム系移民によるテロ行為を背景に、右派ポピュリズム政党に代表される排外主義が高まっている。その一方で、オランダ・フランス・ブリガリアなどの国々では、社会的排除の対象であるイスラム系移民による政党結成も進展している。なかでも、オランダ・ロッテルダムを拠点とする欧州初のイスラム系国政政党であるデンク (DENK) は、トルコ系下院議員 2 名により結党した反人種主義を政党理念とする政党である。17 年の総選挙において、国政選挙に初参加ながら、同党は 3 議席 (下院定数: 150 名) を獲得し、都市部のトルコ・モロッコ系移民の支持を獲得した。

地方自治体選挙権を 1986 年に獲得後、イスラム系移民は既成政党の労働党 (社会民主主義) を通じて政治参加を行ってきた。しかし実際には、彼らの国政への関心、信頼感の低さにより、地方自治体における政治参加に留まっていた。また国内のイスラム系移民の政治動態に関する研究はあるものの、宗教団体・政治運動を経由する社会関係資本の観点での分析が中心であり、既成政党を経由した政治参加の分析は、いまだ不十分な状態である。

本報告では、これまでの労働党を経由した政治参加について検証し、DENK の台頭に至った主要な因子の解明を試みる。2010 年以降、イスラム系移民の労働党離れは、国政・地方自治体選挙ともに顕在化した。階級アプローチの有効性からエスニック・マイノリティの政治的包摂を可能とし、都市部でのイスラム系移民の大規模な支持獲得に成功してきた労働党が、なぜイスラム系移民の政治的な信頼を喪失したのか。具体的には、2010 年以降のイスラム教をめぐる問題の党内対立の政治過程を検証すると共に、労働党の移民政策に関する決議案や調査報告書の分析による検証を試みる。

2. オランダ国内のイスラム系移民の概要

オランダのイスラム系移民は、トルコ系・モロッコ系を中心に約 79 万人存在する。これは、総人口の約 4.7% を占め、四大都市 (アムステルダム・ロッテルダム・ユトレヒト・ハーグ) においては、12-14% と高い人口比率を占める。とりわけ、トルコ系移民は国内で最大規模の移民集団 (人口者数、関連組織数、政治参加) である。1960 年代の二国間協定締結以後、イスラム系移民の受入が開始されるが、その身分は一時的な労働力とされた。また、言語・文化・宗教の相違により、オランダ社会への参入は容易でなく、他

の旧植民地系の移民集団と比較しても、収入(雇用)、教育、住宅などの諸指標をみると、彼らの社会経済的地位は低い傾向にある。

3. 労働党における移民政策の変容

オランダにおいては従来より、多極共存型民主主義の原則に基づき、エスニック集団の要求を民主的プロセスのもとで積極的に統合する政治文化が発達してきた。また既成政党の中でも労働党は、規範面では多文化主義に対する肯定と階級アプローチの有効性により、多数のイスラム系移民の政治・社会的包摂を可能にしてきた。そして、彼らの政治参加を促したのは、労働党による政治的ネットワークとしての社会関係資本の利用であった。

しかし、2009年3月の党大会での決議書の採択は、労働党の移民政策に転換点をもたらした。従来のアクティベーションを重視する社会経済的アプローチに加え、「(イスラム系)移民出身国政府による干渉の防止」、というオランダ(ホスト国)－移民出身国との二国間関係である国際政治的領域が、移民政策における「新たな概念」として導入された。さらに、第二次リュテ内閣への政権参加(2012年11月～)によって厳格な移民政策を追求する自由主義政党と連立を組んだこと、そして労働党アッシャーの(移民担当)統合大臣への就任は、労働党の移民政策の厳格化を促した。さらに、2014年には党内のトルコ系議員同士の意見対立という政党分裂の争議に発展した。

2010年代の労働党におけるイスラム系移民に関する政策の変化は、両者を結節してきたイスラム系移民側の社会関係資本にも影響を及ぼした。イスラム系移民の政治参加において、従来の階級アプローチに対しエスニック・アプローチの優位性が増し、「ムスリムであること」が政治的な共通項として重視されるようになった。そしてこの変化を通じ、これまで労働党が担ってきたイスラム系移民の利益表出における円滑な「橋渡し」に関しても、労働党が十分な調整機能を果たせなくなったことが指摘できよう。

以上により、オランダと移民出身国との二国間関係という国際関係上の要因が、2010年代の労働党の移民政策にいかんにか反映されてきたのか、また「ムスリム」を共通項とする社会的紐帯の浮上が、イスラム系移民の政治参加にいかんにか影響を及ぼしてきたかを明らかにする。その検討を通じ、労働党支持の変化、DENKの結党と勢力拡大に至る政治社会的文脈が明らかになるだろう。

4. 参考文献

Colombo, V (2013) “Political Islam and Islam in politics in Europe,” *European View*, 12:143-152

Otjes, S.& A. Krouwel (2018) “ Why do newcomers vote for a newcomer? Support for an immigrant party,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 45: 1-20.

Öztürk, A. E. & S. Sözeri (2018) “Diyabet as a Turkish Foreign Policy Tool: Evidence from the Netherlands and Bulgaria,” *Politics and Religion*, 11: 624-648.

Partijbestuur van de Partij van de Arbeid (2009) *Verdeeld verleden, gedeelde toekomst Resolutie Integratie*, Utrecht, March14, Partij van de Arbeid.

Yukleyen, A (2010) “State Policies and Islam in Europe: Milli Görüş in Germany and the Netherlands,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 36(3): 445-463.